

—後鼻漏だけが咳の重要な因子ではない—（：CON）

山田 武千代 福井大学医学部耳鼻咽喉科頭頸部外科

後鼻漏の存在する患者で咳を自覚するのは3人に1人である。また、咳を自覚する場合は喘息を合併することも多い。後鼻漏の重要性を論ずる場合、咳の有無ばかりでなく、咳の程度がどの程度かを検討する必要もある。今回我々は、初診喘息患者で、咳及び喘息発作などによる重症度分類と鼻の症状、副鼻腔病変の有無について関係があるかどうかを検討した。後鼻漏は47.5 %で最も多く、45.0 %でくしゃみ、37.5 %で鼻閉、17.5 %で鼻漏、17.5 %で嗅覚障害がみられた。気管支喘息重症度と関係のある鼻症状はくしゃみ ($p < 0.05$) であり、後鼻漏など他の症状では重症度による違いは認められなかった。気管支喘息では副鼻腔病変は73.2%に合併しており、気管支喘息重症度と篩骨洞陰影スコアには相関がみられた ($p < 0.05$)。篩骨洞陰影と関係のある症状は後鼻漏のみであった ($p < 0.05$)。花粉症でみられる咳の場合は乾性の咳がほとんどである。花粉症ピーク時にみられる咳を検討すると咳の有無と関係のある鼻症状は鼻閉であった。喘息患者では、後鼻漏の有無は、重症度とは直接関係はなかった。病態に応じて、咳と鼻症状、副鼻腔病変の関係を考えると、後鼻漏だけが咳の重要な因子ではないことが示唆された。